

空晴れて

小川未明

青空文庫

山間さんかんの寂さびしい村むらには、秋あきが早はやくきました。一時じ、木々きぎの葉はが
 紅葉こうようして、さながら火ひの燃もえついたように美うつくしかったのもつか
 の間まであつて、身みをきるようなあらしのたびに、山やまはやせ、やが
 て、その後のちにやってくる、長ながい沈黙ちんもくの冬ふゆに移うつらんとしていたの
 です。そこにあつた、みすばらしい小學校しょうがっこうへは、遠とおく隣となり
 村らから通かよつてくる年老としとつた先せん生せいがりました。日ひの長ながい夏なつの
 ころは、さほどでもなかつたが、じきに暮くれかかるこのごろでは、
 歸かえりに峠とうげを一つ越こすと、もう暗くらくなつてしまふのでした。
 「先せん生せい、天てん氣きが變かわりそうです。早はやくお歸かえりなさいといけ
 ません。」

少年しょうねんこづか小使こづかいの小田賢一おだけんいちは、いったのでした。子供こどもたちは、すべて去さつてしまつて、学校がっこうの中なかは、空あき家やにも等ひとしかつたのです。教員室きょういんしつには、老ろう先生せんせいが、ただ一人ひとり残のこつて、机つくえの上うえをかたづけられていました。

「小田おだくん、すこし、漢文かんぶんを見みてあげよう。用ようがすんだら、ここにきたまえ。」と、老ろう先生せんせいは、いわれた。

「先生せんせい、しかし、あらしになりそうです。また暗くらくなつて、お帰かえりにお困こまりですから。」と、小田おだは、遠慮えんりよしたのでした。

彼かれは、この小學校しょうがっこうを卒業そつぎようしたのだけれど、家いえが貧まずしくて、その上うえの学が校っこうへは、もとより上あがることのできなく、小使こづかいに雇やとわれたのでした。そして、夜よるは、この学が校っこうに泊とまつて、

留守番るすばんをしていました。雪ゆきがたくさんに積つもると、老先生ろうせんせいも、
 冬の間ふゆあいだだけ、学校がっこうに寄宿きしゆくされることもありました。
 先生せんせいは、小田おだが忠実ちゆうじつであつて、信用しんようのおかげで人物じんぶつで
 あることは、とうから見みていられたので、彼かれに、学問がくもんをさした
 ら、ますます善よい人間にんげんになると思おもわれたから、このごろ、暇ひまの
 あるときは、わざわざ残のこつて「孝経こうきやう」を教おしえていられたので
 す。

ばらばらといつて、落おち葉はが、風かぜに飛とばされてきて、窓まどのガラ
 ス戸どに当あたる音おとがしていました。

「子しの曰たまわくそれこうはてんのけいなり」
 「子しの曰たまわくそれこうはてんのけいなり」
 夫し孝た天てん之の経けい也なり。地ち之の義ぎ也なり。民たみ之の行こう也なり。——この
 経けいは、サダマリというのだ。そして、義ぎは、ここでは道理どうりという

意味であつて、民は即ち人、行はこれをツトメというのだ。」と、
老先生は、教えていられました。賢一は、頭を垂れて、書物
の上を見つめて、先生のおっしゃることを、よく心に銘じてき
いていました。

やがて、講義が終わると、先生は、眼鏡ごしに、小田を見て
いられたが、

「時に小田くん、君はたしか三男であつたな。」と、きかれた。

「はい、そうです。」

「べつに、農を助ける人でないようだな。それなら、東京へ
出て働いてみないか。いや、みだりに都会へゆけとすすめるので
ない。」と、先生は、おっしゃられた。

「先生、私はまだそんなことを考えたことがございません。」

「いや、それにちがいない。どこも就職難は同じい。こと

に都会はなおさらだときいている。それを、こういうのも、じつ

は、昔、私の教えた子で、山本という感心な少年があつ

た。父親は、怠け者で、その子の教育ができないために、

行商にきた人にくれたのが、いま一人前の男となつて、都

会で相当な店を出している。このあいだから、だれか信用の

おける小僧さんをさがしてくれと、私のところへ頼んできている

のだが、どうだな、苦勞もしてきた主人だから、ゆけばきつと、

君のためになるとは思うが。」と、先生は、いわれたのでした。

「今夜、ひとつよく考えてみます。」と、賢一ははつきりと答え

た。

先生^{せんせい}は、歸^{かえ}る仕度^{したく}をなされた。彼は^{かれ}、途中^{とちゆう}まで先生^{せんせい}を送^{おく}

つたのです。

橋^{はし}を渡^{わた}ると、水^{みづ}がさらさらといって、岩^{いわ}に激^{げき}して、白^{しろ}く碎^{くだ}けて

いました。ところどころにある、つたうるしが真^まつ赤^かになつてい

ました。なんの鳥^{とり}か、人^{ひと}の話^{はな}し声^{こゑ}と足音^{あしおと}に驚^{おどろ}いて、こちらの岸^{きし}

から、飛^とびたつて、かなたの岸^{きし}のしげみに隠^{かく}れた。彼は^{かれ}、先生^{せんせい}

と別^{わか}れてから、独^{ひと}り峠^{とうげ}の上^{うへ}に立ちました。まだそこだけは明^{あか}るく、

あわただしく松^{まつ}林^{ばやし}の頭^{あたま}を越^こえて、海^{うみ}の方^{ほう}へ雲^{くも}の駆^かけてゆく

がながめられたのでした。

その夜^よ、小使^{こづか}い室^{しつ}の障子^{しょうじ}の破^{やぶ}れから、冷^{つめ}たい風^{かぜ}が吹^ふき込^こんで

きました。賢一は常のごとくまくらに頭をつけたけれど、ぐつ
 りとすぐに眠りに陥ることができなかつた。

「都会が、いたずらに華美であり、浮薄であることを知らぬので
 ない。自分は、かつて都会をあこがれはしなかつた。けれど、立
 身の機会は、つかまなければならぬ。世の中へ出るには、ただ

あせつてもだめだ。けれど、また機会というものがある。藤本
 先生は、私に、機会を与えてくださったのだ。先生の言葉
 に従つて、ゆくことにしよう。」と、思つたのでした。

晩方から、変わりそうに見えた空は、夜中から、ついに、は
 げしいしぐれとなりました。彼は、朝早く起きて、学校の中
 のそうじをきれいにすましました。そして、囲炉裏に火を起こし

て、鉄瓶てつびんをかけて、先生せんせいたちがいらしたら、お茶ちやをあげる用意ういをしました。そのうち、もう生徒せいとたちがやってきました。やがて、いつものごとく授業じゆぎようが始はじまりました。

休みやすみの時間じかんに、彼は、老先生ろうせんせいの前まえへいって、東京とうきようへ出る、決心けっしんをしたことを告つげると、

「君きみがいつてくれたら、山本やまもとくんも喜よろこぶだろう。ただ注意ちゆういすることは、第一だいに、なにことも忍耐にんたいだ。つぎに、男子だんしというものは、心こころに思おもったことは、はきはきと返事へんじをすることを忘わすれてはならぬ。これは、使つかわれるものの心得こころえおくべきことだ。」といわれたのでした。

賢一けんは、老先生ろうせんせいのお言葉ことばをありがたく思おもいました。そして、

この温情深い先生の膝下から、遠く離れるのを、心のうちで、どんなにさびしく思つたかしれません。

こうして、彼は、ついに東京の人となりました。

きた当座は、自転車に乗るけいこを付近の空き地にいつて、

することにしました。また、電話をかけることを習いました。ま

だ田舎にいて、経験がなかったからです。山本薪炭商の

主人は、先生からきいたごとく、さすがに苦勞をしてきた人

だけあつて、はじめて田舎から出てきた賢一のめんどろをよくみ

てくれました。薪や炭や、石炭を生産地から直接輸入

して、その卸や、小売りをしているので、あるときは、駅に到

着した荷物の上げ下ろしを監督したり、またリヤカーに積ん

で、小売^{こう}り先^{さき}へ運^{はこ}ぶこともあれば、日^ひに幾^{いく}たびとなく自^{じてん}転^{しゃ}車^{しゃ}に

つけて、得^{とく}意^い先^{さき}に届^{とど}けなければならぬこともありましした。

彼^{かれ}は、自^{じてん}転^{しゃ}車^{しゃ}のけいこをしながら、いつか空^あき地^ちに遊^{あそ}んでい

る近^{きん}所^{じよ}の子^こ供^{ども}たちと仲^{なか}良^よしになりました。子^こ供^{ども}を好^すきな彼^{かれ}は、

そこに田^{いな}舎^{なか}の子^こと都^と会^{かい}の子^こと、なんら純^{じゆん}情^{じよう}において、差^さ別^{べつ}の

あるのを見^みいださなかつたのでした。

「お兄^{にい}さん、上^{じよう}手^ずに乗^のれるようになったのね。」と、女^{おんな}の子^こや、

男^{おとこ}の子^こらは、彼^{かれ}の周^{しゆう}圍^いに集^{あつ}まってきていいました。

賢^{けん}一^{いち}は、こうした子^こ供^{ども}たちを見^みるにつけ、もはや、ときどきは、

しぐれと混^まじつて降^ふるであろう故^こ郷^{きやう}の村^{むら}に、毎^{まい}日^{にち}学^{がっ}校^{こう}へ集^{あつ}まってくる親^{した}しみ深^{ぶか}い生^{せい}徒^とらの姿^{すがた}を目^めに浮^うかべました。「こちら

は、こんなにいい天気だのになあ。」と、同じ太陽でありながら、その地方ちほうによつて、与える恵慈けいじの相違そういを考えずにはいられなかつたのです。彼は、藤本先生ふじもとせんせいにも、

「こちらへきて、幸福こうふくの一つは、晴れわたった青い空を見られることですが、それにつけ、いつそう、あのさびしい山国やまぐにで、働く人たちのことを思います。」と、書いたのでありました。

ある日、彼は、往來おうらいのはげしいにぎやかな道を自転車に乗のつて走はしっていました。このとき、横よこあいから前まえに出た老人ろうじんがあつたが、ふいのことであり、彼は、この老人ろうじんを傷きずつけまいとの一念ねんから、とつさにハンドルをまわしたので、おりから疾走しつそうしてきた自動車じどうしゃに触ふれて、はねとばされたのでした。

彼は、直ちに病院へかつぎ込まれました。傷は幸いに脚の挫折だけであつて、ほかはたいしたことがなく、もとより生命に關するほどではなかつたのです。主人はそれ以来、日に幾たびとなく、病院に彼をみまいしました。

「今日は、気分はどんなだね。」と、たずねました。

賢一は、痛ましくも、頭から足先まで、白いほうたいをして、横になつていました。

「だいぶん、痛みがとれました。」と、彼は、答えた。

「まあ、たいしたけがでなくてよかつた。なにしろ、東京では、日に幾人ということなく、自動車や、トラックの犠牲となつてゐるから、この後も、よく氣をつけないならぬ。そ

れに較くらべると、田舎いなかは、安心あんしんして道みちが歩あるけるし、しぜん人ひとの氣き持もちも、のんびりとしているのだね。」と、主人しゅじんは、いいました。

「そうだと思おもいます。しかし、私わたしの不注ふちゅう意いから、ご心配しんぱいをか
けましてすみません。」

「君きみは、おばあさんをかばおうとしたばかりに、自分じぶんがけがをし
たという話はなしだが、私わたしは、君きみの誠実せいじつに感心かんしんするよ。」

「あのときは、ただ老人ろうじんをひいてはたいへんだという心こころだけで、
ほかのものが目めに入はいらなかつたのです。」

こういつて、賢一けんいちは、まことに危険きけんだつた当時とうじを追想ついそうしまし
た。

「君きみがきてくれて、私わたしは、いい協きょう力りき者しやができたと思おもつてい
る。人ひとは、たくさんあつても、信用しんようのおける人ひとというものは、
存ぞん外がい少ないものだ。」と、いつて、主人しゅじんは賢けん一いちをばげまして
くれしました。賢けん一いちは、ただ、その厚こう情じように感謝かんしゃしました。彼かれ
は負傷ふしょうしたことを故郷こきやうの親おやにも、老先ろうせん生せいにも知しらさなかつ
たのです。孝こう經きやうの中なかに身しん体たい髮はつ膚ふ受う之を父ふ母ぼ。不あえて敢きしやう毀せざ
傷はな孝こう之これ始このはじめなり也なり。と、いつてあつた。

彼かれは、自じ分ぶんの未いまだ至いたらぬのを心こころの中なかで、悔くいたのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「空《そら》晴《は》れて」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

空晴れて

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>